

令和6年6月13日
学校法人獨協学園
獨協医科大学

脊柱後縦靭帯骨化症患者が抱える痛みとしびれに対する医療ニーズを

患者・市民参画(Patient and Public Involvement)研究で証明

高畑雅彦准教授（獨協医科大学整形外科学）と北海道脊柱靭帯骨化症友の会（増田靖子会長、研究当時）、遠藤努特任助教（北海道大学医学研究院、整形外科学教室）、山崎正志班長（厚生労働省難治性疾患政策事業靭帯骨化症研究班）らの共同研究グループは、患者・市民参画（PPI）の原則を取り入れた調査研究によって、指定難病である脊柱後縦靭帯骨化症（ossification of posterior longitudinal ligament: OPLL）患者が抱える痛みやしびれに対する既存の治療法の効果が乏しく、日常生活や社会生活に大きな悪影響を及ぼしていることを明らかにしました。本研究成果は、患者中心の医療へのシフトが進む中で、OPLL 患者が価値を感じることができる治療（バリューベースドケア）が十分に提供されていないことを示しており、重要な課題を浮き彫りにしました。

研究の背景

OPLL は脊椎骨を繋ぐ後縦靭帯が硬い骨に変化し、脊髄や神経根を圧迫する疾患です。日本を含む東アジア人に発症率が高く、無症候性を含めると国内には数百万人（約3%）の患者が存在すると推定されています。OPLL の原因は未だ不明で、根本的治療法は開発されていません。治療の主体は脊髄の圧迫を解除する手術治療であり、四肢麻痺の改善という点では一定の効果が期待できますが、患者の自覚的な症状である痛みやしびれに対する治療効果については評価が難しいこともあり、医療者の理解が不足していました。そこに患者会が問題意識を持ち、医療者や研究者、製薬企業などへOPLL 患者が抱える痛みやしびれの現状や既存の治療法の効果を伝えることを目的に本研究が立案・実行されました。

調査方法

北海道脊柱靭帯骨化症友の会（患者会）が会員を対象にアンケート調査を実施しました。調査項目は痛み、しびれ、生活の質（QOL）、手術や薬物治療に対する満足度、治療後の改善状況としました。質問項目は患者会の代表者と整形外科医が共同で設定し、患者会がアンケートを実施しました。回答は匿名化され、医学研究者が統計解析を行いました。

主な結果

調査対象の平均年齢は69歳で、手術後あるいは症状出現から13年程度経過した慢性期のOPLL患者です。121名中93名(78%)はOPLLに対して手術既往のある重症者でした。痛みの質をSpinePainDETECTというツールで調査すると、56%の患者が神経障害性疼痛、残りの41%は骨や関節、筋肉などの神経以外の痛みと判定されました。手術によって痛み、しびれが“かなり改善した”と回答したのはそれぞれ24%、18%にとどまり、34%の患者は“まったく改善しなかった”と回答しました。薬物治療を受けた患者のうち、痛みとしびれが“かなり改善”と回答した患者はわずかに2%のみで、“全く改善しなかった”と回答した患者が31%いました。発症後に仕事を辞めた、または転職したと回答した患者が47%おり、その理由として最も多かったのは首の痛みで、次いで腰痛、下肢の痛みやしびれ、歩行障害と続きました。麻痺だけでなく痛みやしびれが仕事継続の支障になっていることが明らかになりました。

まとめと今後の展望

本研究は、PPIという画期的な研究手法を用いて患者のリアルな声を拾い上げることで、OPLL治療の現状と課題を明らかにしました。目に見える運動麻痺の改善とは異なり、痛みやしびれに対する治療効果は医療者には伝わりにくいことは確かです。しかし、バリューベースドケアの観点からは痛みやしびれの改善は重要な治療目標であり、既存の治療法では不十分であったという調査結果はアンメット・メディカル・ニーズの存在を示しています。OPLL患者が抱える苦しみを軽減し、生活の質や社会生活を向上させるため、OPLLという疾患によって引き起こされる痛みやしびれを軽減させるより効果的な治療法の開発に取り組む必要があります。

書誌情報および本件取材についての問い合わせ先は、以下の通りです。

論文：A patient and public involvement study to explore patient perspectives on the efficacy of treatments for pain and numbness derived from ossification of posterior longitudinal ligament of the spine. *Journal of Orthopaedic Science*. 2024 May 28;S0949-2658(24)00098-8. doi: 10.1016/j.jos.2024.05.004. Online ahead of print.

著者：Masahiko Takahata, Yasuko Masuda, Tsutomu Endo, Yoshinao Koike, Masashi Yamazaki, Hiroshi Taneichi, Masayuki Miyagi, Hiroshi Takahashi, Norimasa Iwasaki

【研究チーム】

獨協医科大学整形外科学：高畑雅彦准教授、種市洋主任教授／北海道脊柱靭帯骨化症友の会：増田靖子会長（研究当時）／北海道大学医学研究院整形外科：遠藤努特任助教、小池良直医師、岩崎倫政教授／脊柱靭帯骨化症厚労科研政策研究班（筑波大学整形外科）：山崎正志班長、高橋宏准教授／北里大学整形外科：宮城正行講師

本件に関するお問い合わせ先

獨協医科大学整形外科学講座 高畑 雅彦（たかはた まさひこ）

電話（代表）0282-86-1111 e-mail: m-takahata@dokkyomed.ac.jp